

2016年6月16日

金沢地方裁判所 御中

意見陳述書

原告 中村照夫

私は中村照夫と申します。2011年3月末、40年勤めた石川県庁を定年退職しました。1974年2月23歳のとき石川県職員労働組合（以下、県職労と略す）金沢地区青年部の役員となり、以来、組合運動にたずさわってきました。

私が原子力発電所（以下、原発と略す）の問題に目覚めたのは、1976年9月、県職労本部が開催した反原発学習会に参加したからです。それまで私は原発に特別の問題意識も抵抗感もありませんでした。むしろ、手塚治虫さんの「鉄腕アトム」に魅了され、原子力は可能性を秘めた未来のエネルギーという認識でした。

講師の京都大学原子炉実験所の小林圭二さんの言葉に私は耳を疑いました。「原子力に未来の可能性を見いだしてこの世界に入ったが、知れば知るほど危険なものだと分かった」「原発は動かしてはならない」と言われたのです。国の原子力政策に全く疑問を持っていなかった私は、この「科学者」の講演に聞き入りました。

氏は、「原発は5重の防護壁で守られているというが、肝心要の燃料棒を覆っているサヤは、核燃料ペレットが溶ける前に溶けてしまいサヤの役目を果たさない、しかも核燃料ペレットは最強の耐熱性を持っているため、一端、溶け始めると2000度を超えて無敵となり、圧力容器や格納容器など全ての壁を溶かしてしまう」と続けました。氏はこのことを、「原発は毒饅頭、甘くて美味しい薄皮に包まれた猛毒」と表現されました。まさに私にとって、「原発に目覚めた」瞬間でした。

原発問題は、科学であり化学であり物理であり、シロウトには難しい領域です。だからこそ間違いや誤解も溢れています。しっかりと正しい情報を伝えなければならぬと肝に銘じています。そうしないと、政府や通産省（当時）、原発推進派の学者が語る「嘘」や「ゴマカシ」、「安全神話」に騙されてしまうのです。

その後、能登エネルギー基地化反対や柏崎原発反対闘争など、必ずと言っていいほど参加し、多くの青年部員も連れて行きました。1979年3月スリー・マイル・アイランド原発事故や1986年4月チェルノブイリ原発事故で、「核は制御できないもの」、「安全性は、経済性や効率性と天秤にかけられ、削られる」、「原発と核（兵器）は表裏一体」、「ヒューマンエラーは防ぎようがない」ということを学びました。県職労では、その危険性を宣伝し反（脱）原発闘争の重要性を訴えてきました。

そんな2010年10月、自治労石川県本部が主催する「地方自治研究」集会在加賀市で開催され、私は発表の機会を得ました。研究テーマは、「プルサーマル計画のまやかし」とし、約30分ほど時間をいただきプロジェクターを使い発表しました。

（構成：プルサーマルとは、そもそも原発とは、繰り返される原発事故、なぜ安全性は無視されるのか、被ばく者を生み出す原発、廃炉後1万年以上管理、夢の原子炉“もんじゅ”の夢、核燃料サイクルへの固執、エネルギーは無尽蔵、自治労こそ脱原発の先頭に。）

中でも、「自治労こそ脱原発の先頭に」に力を入れました。原発事故が起これば、その最前線で自治労組合員たる自治体職員が、放射能という目に見えない危険や恐怖と闘いながら、まさに命懸けで業務に当たらなければならないからです。住民の避難に、命懸けで取り組まなければならないからです。だから、自らの労働条件や放射線防護という「未知」の分野に、労組として自治体当局と交渉を積み上げ、労働環境を整備しなければならないと訴えました。そのことがあって初めて、住民避難のために私たちは躊躇なく働くことができるのです。

ところが残念ながら、小林圭二さんが語った、そして私が語ったわずか5カ月後に、その事故は現実のものとなったのです。

福島第一原発事故（以下、フクイチと略す）では、安全神話の中で作られた避難計画などまったく役に立ちませんでした。迅速放射能影響予測システム（スピーディ）はまったく活用できませんでした。着の身着のまま、右往左往する被災民、何回も避難場所を移動せざるを得なかった避難民、自宅より線量の高い所に避難してしまった悲劇、病人を死に至らしめた逃避行のような避難、子どもたちを屋外で遊ばせてしまった放射能禍、ヨウ素剤さえ「勝手に飲むな」と指示する国や県の役人。しかし、放射能は怖くないという「安全神話」を語るために派遣された学者たち。嘘のような本当のことがあちこちで起こったのです。

避難後には、原発を恨み、将来を悲観して自死する人が少なからず出ました。被災地の市民を守る人が、どこにいるのでしょうか、命を守る人がどこにいるのでしょうか。「地方自治」は破壊され、国の下請け機関になり下がっています。我々の反（脱）原発運動の弱さと非力さを痛感しました。そして、政府と電力、自治体当局の無為無策に憤りを禁じ得ません。

「原発のどこが安全でクリーンなのでしょう」。放射能で汚染したキャベツ出荷を止められ、自死した父親への思いを怒りで語った青年の声が耳について離れません。

この重大事故の責任は必ず取ってもらわなければなりません。だって彼らは、「安全だ」「クリーンだ」「エネルギーは必要でしょう」と、嘘と恐喝まがいの主張で原発建設を強行したのです。電力料金で作った「札束」で私たちの「生活と土地」を無理やり奪い、集落の団結や人々の「助け合いの輪」を壊し、人間の尊厳まで奪ってしまったのです。

追求すべきです。原発事故の原因は何なのか。それがあって初めて「今後の原発をどうするのか」という真摯の議論がスタートできるのだと思います。しかし現実はそのようになっていません。安倍政権と原子力ムラは、原発再稼働と原発輸出で息を吹き返そうとしています。事故の原因のすべてを津波のせいにして、地震の揺れで壊れた可能性は隠蔽して、「新規制基準」に適合すれば「再稼働」させるとしています。事故原因も分からないのに、なぜ、フクイチ後の世界一安全な原発と言えるのでしょうか。新潟県泉田知事が言っているように、単なる「性能試験」にパスしただけなのではないのでしょうか。

たとえ100万人に1人か2人の罹患率である小児甲状腺ガンが、福島県で100人を超えようとも、50年間で40万人がガン死しようとも、無責任安倍政権は、ナショナリストのリーダー（米英新聞紙が呼称）として原発と核燃サイクルを強行しているのです。国民より国家なのです。こんなこと許せますか。

国民の血税を湯水のごとく使って、フクイチ対策もしていない原発を「再稼働」することの無責任さを問わなければなりません。

同時に、いままで、政府、経産省、そして原発政策を推進する学者の言い分に依拠して、結果として原発建設を推進し、原発災害に手を貸した裁判官の皆さん、避難計画の実効性を一顧だにして来なかった裁判官の皆さん。フクイチがなぜ起こったのか、誰が責任をとったのか教えてください。誰も責任をとっていないから、いや責任をとらなくていいから、無責任にも原発の再稼働ができるのではないのでしょうか。フクイチの原因も事故の経緯も分かっていないのに、地震列島であり活断層の巣である日本で原発を動かせるのではないのでしょうか。

事故原因と責任を明確にし、一刻も早く脱原発の方向に舵を切るべきです。国民の生活や命を、企業の儲けやエネルギーと天秤にかけないでください。原発を輸出して、核を拡散しないでください。

再度言います。不可解なもの、分からないものは安全の側で、住民の命や生活を守る側で判断してください。そうすれば、未来に素晴らしい社会を残すことができます。

私も自分の生涯をかけて、原発と核開発に反対し続けることを申し上げ、意見陳述とします。ご静聴、ありがとうございました。